

性を搾取する者

ECPAT

(本論は「子どもの商業的性的搾取に反対する世界会議」
【1996年8月27～31日於ストックホルム】に提出された報告書の仮訳である)

(財) 女性のためのアジア平和国民基金

総論

ほとんどの子ども売春は性産業の主流に組み入れられ、売春「市場」の安い部分、条件は最悪で客の「処理量」は最高の部分に集中する傾向がある。子ども達の中には特にペドファイル（小児性愛者）や少年少女性愛者に買われる子どももいるが、年間数百万に上る18歳以下の子どもを搾取する男の大多数は、まず初めに買春の利用者となり、その買春を通して子どもへの性的虐待者になるのであって、逆ではない。そのため、子どもへの性的搾取をする人たち（無差別性愛者であれ、少年少女性愛者であれ、ペドファイルであれ）は、主として次のグループから生じる。買春する地元の人々、兵士、船員、トラック運転手、出稼ぎ労働者、出張中のビジネスマン、観光客、外国人定住者、援助組織のスタッフ、家庭内労働者の雇用主。こうした意味あいでは本稿では「ペドファイル（小児性愛者）」「少年少女性愛者」「無差別性愛者」という言葉を定義し、次に、ペドファイルや少年少女性愛者が子どもに性的に接触するさまざまな方法を観察し、たいていの場合、に非常に無防備な状況に置かれた子どもや、売春させられている子どもをターゲットにすることを明らかにする。

また、本論は商行為としての子どもの性的虐待の動機を検討し（なぜ人々は売春という性的接触を買いたいのか、このことが売春させられた子どもへの虐待とどのように結びつくのか）、同時に商行為ではない子どもの性的虐待の動機を探って、いずれの場合も性的虐待者が自分の虐待行為を合理化し、正当化するために用いる認識のゆがみを検討する。

次に、子どもの性的搾取に関する国内および国際的な組織についても、子どもを性的に搾取する人たちの取り締まりと更生の可能性、将来の防止活動の提案という面から簡単に触れる。あまりにも多くの子どもたちが性産業の主流で性的に搾取されているため、一般の人々や警察や法曹界の買春に対する姿勢が世界中で変わる必要があることを強調したい。取り締まりの対象にならなければならないのは買春をする人たち（搾取者）であって、売春させられる子どもたち（犠牲者）ではないのである。同時に、国内や外国で性的に子どもを搾取する少年少女性愛者やペドファイルを効果的に取り締まったり、思いとどまらせたり、更生させるために、国内および国際的な取り組みや協力がさらに必要である。

性的搾取者

子どもの性の商品化と搾取に反対する会議は、子どもを性的に搾取する人たちの行動につ

いて考えることになるだろう。彼らの正体、行動、動機についての問題に焦点をあて、彼らの行動を変えることができるかどうか、またいかにしてコントロールできるかについて検討する予定である。

I 定 義

1. 「ペドファイル（小児性愛者）」と「性的虐待の対象に子どもを選ぶ者」

「ペドファイル（小児性愛者）」は精神医学の用語で、性的に成熟する直前の子どもだけに性的興味を持つ人格異常の大人に用いられる。ペドファイルの大多数は男性であるが、女性のペドファイルもいないことはない。男か女のどちらかにだけ興味を持つペドファイルもいれば、男でも女でもどちらでもよい者もいる。ペドファイルの性的な興味に基づく行動はすべてまちまちである。性的な生活を空想に限定している者もいる（しかし、子どもポルノをマスターベーションに用いた場合は、間接的ではあるが子どもの性的虐待に関わっていると言える）。衝動に従って行動する人たちはさまざまな形で子どもを虐待する可能性がある。「身体的に接触しないで虐待する」（性器を露出したり、ポルノを見せたり、それについて話したりする）者もいれば、「身体的に接触して虐待する」（性器に触れたり、愛撫したり、口、肛門、膣への挿入を試みたり、実際に挿入したりする）者もいる。

本稿では「性的虐待の対象に子どもを選ぶ者」とは、性的な好みの対象が、思春期（第二次性徴が発現し生殖能力を持つにいたる時期）に達していたり、この時期を過ぎた子どもである者たちを言う。このような虐待者は男性であることが多いが、必ず男性であるとは限らない。犠牲者には男の子でも女の子でもなりうる。また、精神医学では彼らが未熟で無力な性的パートナーを好むことを、人格障害（ヘベフィリア）の現れと見る。ペドファイルも子どもを選ぶ性的虐待者もその手口から見て、同質の人々からなるグループではない。臨床医や臨床医とともに働く司法・警察当局は、主な3つの行動パターンを明らかにしている。第一のパターンは「誘惑」である。これは典型的に一種のナルシズムが動機になっている加害者が行う。「無垢な」子どもに自分自身の失った部分を見るとか、虐待する子どもに強い感情的な一致の感覚を抱くのである。このタイプの虐待者は巧みに人を操る（子どもだけでなく、大人や世論も操ることが多い）。彼らは子どもを誘惑するために、愛情を示したり、注意を引いたり、贈り物をしたりする。また、性的虐待の準備に長い時間をかけて犠牲者を「教育」したり、こどもに暴露させないように脅したり、恐喝

したり、身体に暴力をふるったりする。二番目のパターンは「内向的な」加害者である。子どもが好きだが「誘惑」する対人関係の技術を持たない。こうした虐待者は典型的に、犠牲者に最低限しか言葉で意志を伝えないことが多いし、知らない子どもや非常に幼い子どもを虐待する傾向がある。三番目は決して一般的ではないが、「サディスティック」な加害者である。子どもに性的な興味があるだけでなく、犠牲者を肉体的または精神的にいたぶることで性的な快感を得る。この種の虐待者は子どもに接触するために誘惑するものを使ったり、力を用いたりする可能性があり、他のタイプの虐待者よりも犠牲者を誘拐したり、殺したりする可能性が高い。

2. 「状況次第で子どもを性的に虐待する者」

「状況次第で子どもを性的に虐待する者」とは、子どもそのものに性的興味があるからではなく、いくつかの理由で性的に子どもを搾取する大人の男女を言う。すなわち、道徳的にも性的にも見境が無く、子どもを性的なパートナーとして「試して」みたいと思うとか、あるいは、a)自分の理想にぴったりの肉体的魅力のある子どもと性的に接触することができる、b)子どもの年齢や子どもの承諾の本質を勘違いさせ、抑制を払いのける要因が存在する、状況になったなどの理由である。子どもを選ぶ性的虐待者やペドファイルと異なり、この状況派の性的虐待者は性的パートナーとして一貫して、あるいは意識的に子どもを探したりはしない。自分の性的なパートナーが14歳でも24歳でも関係なく、自分の「好みに合っていて」、「魅力的」であればよい。このタイプの虐待者は必ずしも（文化的に規定された性的規範からの逸脱という意味で）性的「倒錯」とは言えない。というのは、こうした男性や女性が魅了される身体的特徴は「若々しい」女性美または男性美という文化的な理想に一致することが多く、「子どものような」純粋さという文化的な理想には一致しないからである。子どもたちはさまざま度合いで身体的に成熟している。例えば14歳か15歳の少女は大人の女性に備わっている身体的な特徴(大きな胸、「腰のくびれた」体など)と高く賛美される若さの特徴(健康な筋肉の状態、しわがない、体毛が少ない肌など)を合わせ持つことができる。また、ペドファイルではなく「正常な」男性向けのポルノ制作に使われるモデルはほとんどが18歳以下であって、法律的にも年齢的にも子どもであるが、身体的に「成熟」し、性的美しさという文化的理想に近い。そういう姿を見て性的な衝動が起きる大人を、必ずしも性的または心理学的に「異常」と理解することはできない。

II 子どもへの性的搾取者の供給グループ

ペドファイルと選択的な子どもの性的虐待者、子どもたちに性的に接触する方法は多様である。虐待する機会を与える仕事や地位を探したり、比較的簡単に子どもたちに性的に接触できることがわかっている地域に移動することもある。こうしたことは、一定の子ども集団が特に性的に虐待される危険があることを意味している。ストリートチルドレンや孤児院や地方行政機関に保護されている子どもは、責任や権威ある地位についている大人から性的虐待を受けやすい最も明らかな例だろう。彼らは、虐待行為を「承諾」という作り話で固めた非暴力的な虐待者の標的になりやすい。また、こうした子どもたちは明らかに感情的に飢えている。物質的にも恵まれない。責任や権威ある地位についている大人はしたがって、約束や脅しやわいろで子どもを操ることができるし、自分への虐待にたいして子どもに共犯者のように思わせることも多い。貧しい国にも豊かな国にもこうした方法で虐待されたことがある子ども、現にされている子どもは、とりわけ売春斡旋業者やポルノ制作者のよって商行為としての性的搾取にさらされやすいことを示す証拠はたくさんある。その上、商行為としての性的搾取は、実際には子どもが信頼していたり恐がっている大人から受ける虐待の一部である場合がある。彼らは子どもが売春のポルノに使われるのを見て、おそらく金銭的な利益だけでなく、性的で心理学的な快楽を得るのだろう。また、戦争地帯や難民キャンプや刑務所にいる子どもたちはストリートチルドレンと同様、これまでに述べたような暴力を伴わない虐待だけでなく、特に知らない人から暴力を伴う虐待を受けやすい。

子どもたちの中にはペドファイルによって、またペドファイル向けに限定して売春させられる子もいるが、子どもの売春の大半はペドフィルや選択的虐待者の欲望にだけ応じる孤立した「特定市場分野」で働いているというよりは、商品としての性を買いたいと思うすべての人のための性産業に組み込まれている。豊かな国でも貧しい国でも、売春婦のかなりの割合が18歳以下であるだけでなく、年若い売春婦は条件的に最悪で、客の「処理量」は最大の売春市場では最も安い部分に集中する傾向があるのは事実である。したがって、商行為としての性の需要を生み出すグループは何であれ、子どもの性的搾取者を数多く供給していると推測でき、その多くは状況次第の性的虐待者だと思われる。彼らが子どもの性的虐待者である理由は、一方で性的価値を若さに置き、他方で大勢の子どもたちに（直接力づくで、あるいは経済的必要性をたてに）性産業で働くことを強いる世界で、自分が買春するからである（それともストリップショーやセックスショーの客であったり、ポルノの購買者であったりもする）。ここで意味することをまとめると、おびただしい数の子どもに対する性的搾取者

(状況次第であれ選択的であれペドファイルであれ) を供給しているのは、以下のグループということになる。

1. 軍 隊

国内の兵士も外国の兵士も昔から、商品としての性の需要のかなりの割合を占めてきた。性産業が非常に発展した貧しい国々の中には、現在軍政権だったり、最近まで軍政権であったとか、外国の軍隊の主要な基地があるか、かつて基地があった国がいくつかある。最近では軍隊と買春の関係は、国連の平和維持軍の駐留で売春の規模が驚くほど大きくなったという最近の例に示される。兵士は、孤児になったり、捨てられたり、難民になった少女の性的サービスに金を払うことが多く、その中には12歳くらいの少女もいた。一方で、NGOは、10代前半の少女が実質的に奴隷のような状況で売春宿に置かれ、休暇中の地元の兵士に性的なサービスを強いられている国がいくつもあることを報告している。また、兵士はレイプなどといった形の子どもへの性的虐待にも責任があることがある。これは特に戦争地帯では事実である（最近の例では、ウガンダの反乱軍やボスニアのセルビア人の軍隊に対して申し立てがあった）。

2. 船員とトラック運転手

船員とトラック運転手は買春と深く結びついていることで知られるもう一つのグループである。大勢の子どもの売春婦が世界中の港町の赤線地帯で働いている。客のほとんどは商船員、漁夫、海軍兵士である。また、トラック用の「途中停車地」やその周囲にも子どもの売春婦がいる。

3. 移住労働者

移住労働者も商品としての性の需要を生み出す大きな源となっている国は世界に少なくない。都市での仕事を探して農村から移住した男たちは、赤線地帯の大人の売春婦と並んで子ども売春婦の重要な客である。同じように、多くの鉱山地域（特に南アメリカ）の売春宿はほとんど移住労働者の客だけに頼っていて、その売春婦は13歳から22歳までの少女である。彼女たちは実際には奴隷状態に置かれていることが多い。

4. 出張中のビジネスマン

特に海外に出張中のビジネスマンの買春がはびこっている。「コールガール」という売春婦を呼んだり売春宿を訪れたりする「接待」をビジネスの相手から受けることはよくある。企業の中には「忠実」であるとか有能な管理職に海外のセックス休暇で「報奨」を与える会社もあれば、孤立した地域で働く男の社員に、仕事以外に自由な性的なサービスを

期待された家政婦を与える会社もあると報告されている。ビジネスが目的の海外旅行でも、ペドファイルや選択的子どもの性虐待者は低価格で比較的安全に性的興味を追求する機会を持つことができる。実際に選択的虐待者へのインタビューによれば、自分の好みの性的「対象」を簡単に手に入れられる場所に頻繁に行けるという理由で、特定の国でビジネス上のつながりをつくることがあるとのことである。

5. 買春観光客（セックスツーリスト）

買春観光客とは、レジャー旅行の間にその土地の女や男そして子どもを性的に搾取する人々である。彼らは均一のグループではない。買春観光客の大多数は異性愛者の男性であるが、同性愛者やペドファイルもいるし、女性の買春観光客もいる。こうした人々の年齢は18歳から80歳までにわたり、国や民族や社会経済的な背景もさまざまである。多くのリゾート地域では、買春観光客が売春需要の大半を占める。休暇旅行に特別の行き先を選ぶペドファイルや選択的虐待者もいる。こうした場所では比較的安く簡単かつ安全に子どもと性的に接触できることを知っているからである。10代後半から20代前半の若い男女との匿名でのさまざまな性的出会いを経験したい男性の数ははるかに多い。ちょうどスキーがスキー休暇をとる人々のレジャー活動の中心であるのと同じように、地元での性的搾取は彼らの休暇の中心である。また、男女含めて旅行者の中には表面上さまざまな理由（その土地の文化や気候、ドラッグが手に入れ易いこと、水上スポーツの設備など）で目的地を選ぶが、そこで少数の土地の子どもや大人とロマンチックな関係をもったふりをする者もいる。後者のタイプは、自分たちは売春婦を買っているという事実を認めず、自分たちの搾取の行為を「休暇中のロマンス」だと思っていたがる。このグループと並んで、また重なることも多いが、きわめて明白な「人種差別的」な性的幻想を抱く買春観光客がいる。彼らは安くて簡単で安全に性的に接触できる「東洋人」、アジア人、黒人、ラテン系の男女や子どもをつかまえるために旅行するのである。

6. 外国人定住者

買春観光客が好む国はたいてい、先進国からの移住者が多く住む国でもある。こうした外国人定住者はふつう、引退した人、専門家、小企業主などが多い。旅行産業に関係している人もたくさんいるし、直接売春に関わっている人もいる。（買春観光客の目的地には、外国人定住者が所有ないし管理している売春宿や酒場があることが多い）。こうした国での売春（大人も子どもも含めて）の常連客の一部も外国人定住者である。また、買春観光客や外国のビジネスマンに女性や子どもを斡旋して儲ける外国人定住者の場合もあるし、

ポルノを作る目的で子どもたちを搾取したり、外国人定住者仲間や訪れる友人や観光客に子どもを斡旋するペドファイル「組織」に関係している外国人定住者もいることが知られている。

7. 地元の人々

軍隊関係者向けに限定した売春宿で働いている場合を除くとしても、世界中の売春婦は、船員や兵士、移住労働者や外国のビジネスマン、観光客だけでなく、地元の客をも惹きつける。世界どこでも地元の客は子ども売春と大人の売春の両方の最大の需要源である。地元のペドファイルや選択的虐待者も、子どもと性的に接触する手段として買春することが多い。これは豊かな国にも貧しい国にもあてはまる。

8. 援助組織のスタッフ

援助組織で働いていると簡単に子どもに接近できることが多い。NGOやボランティアワーカーが、世話をしている子どもを性的に虐待する事件が最近いくつか起きている。援助スタッフの中にも海外に滞在している間に買春する人たちがいる。先進国でも発展途上国でも、宗教伝道者や教会が運営している社会福祉プロジェクトにペドファイルや選択的虐待者が加わることがあるのも事実である。聖職者やおそらく情け深い「キリスト教徒」がペドファイル組織を運営するために職業センターや宿泊施設を開く例や、また子どもに性的に近づく手段として、宗教に所属しているおかげで与えられた信頼や威信を利用するような男たちの例も数多くある。

9. 家庭内労働者の雇用者

多くの国で12歳から18歳の子どもたちは家庭内労働者として雇われている。彼らは雇い主に性的に搾取されやすい。また、その子どもが移民や人身売買の犠牲者の場合は、雇い主が彼らに非常に大きな力を及ぼしているため、性的虐待を拒否できない（多くの場合、子どもの生計だけでなくその国に住む権利も雇い主が握っている）。

Ⅲ 商行為として子どもを性的に虐待する動機

どこの社会も、人間相互の性関係を支配し抑制するルールやしきたりがある。売春というしばしば違法のうす暗い世界は、性的行為を抑制する法律やルールを逃れることのできる場所を提供し、その意味で、多くのペドファイルや選択的子どもの性的虐待者にとって子ども売春が魅力を持つことは明かである。法律や社会的しきたりによって、こうした人々が非商業的な場所で自分の性的興味を満足させることは非常に難しくまた危険であるが、売春なら

ば「すぐに接触」できるし、子どもを選ぶこと可能である。思春期前の子どもが大勢売春させられている国は非常に少ないので、子ども売春で有名な国には世界中からペドファイル（少なくとも旅行をする余裕がある人たち）がやってくる。

しかし、子ども売春の客がすべてペドファイルや選択的虐待者だと単純に仮定することはできない。調査によれば、働く環境しだいで子ども売春は週に2人から30人の客、すなわち1年に100人から1,500人の客をとるとされている。子ども売春の数を最低限に見積もっても、子ども売春の客の数は年に数百万人になる。さらに、この何百万人も客を国籍や社会経済的、文化的、宗教的な背景から見ると、多種多様なグループに分けられる。二つの医学的に定義された人格異常であるペドフィリアとヘベフィリア（比較的小数の例外的な西洋の男性のサンプルをもとにした診断上のカテゴリー）だけで、これだけ大きく多様なグループの行動を説明しきれないのは明らかだろう。実際に、こうした男たちの大多数は、もともとペドファイルかヘベファイルで子どもたちに性的に近づく手段として買春をしたのではなく、まず買春をして、その買春を通じて子どもへの性的虐待者になったと仮定する方がより合理的である。このため、人々が性的に子ども達を商品として虐待する理由を理解するには、なぜ売春婦を買いたいと思うのか、このことが売春させられる子どもの虐待にどのように関係するかという、全般的問題に取り組む必要がある。この章ではきわめてさまざまな環境で買春する人々を研究する。全般的に、男性は（ときには女性も）以下のような理由から買春すると言える。

1. 性的「はけ口」や身体的接触を生物学的ないし感情的に必要なものと想像し、それを満足させるために買春する客。

多くの社会は、人間（特に男性）には空腹や排泄の欲求と似た生物学的な性的衝動がある、という信念を社会化している。男性の性的欲求は「欲望」というよりも「必要なもの」という観点で見られ、決まった非商業的なセックスパートナーを持たないとパートナーと離れて暮らしている男性が買春をするのは、身体的心理的健康のために必要なことだと信じている男性が少なくない。船員やトラック運転手や兵士や移住労働者が非常に多く買春をするのはこうした考え方に、多少なりと支えられているように思える。旅行者や地元の人々もこうした考え方で売春婦に対する自分の性的搾取を説明することがある。寂しさから肉体的な交渉、心地よさ、性的「解放」を求めて買春したいという衝動に駆られると言うのである。

理論的には、こうした男性にとって買春と子どもの性的搾取のつながりはまったく偶発

的なもの（つまり、彼らが子どもを虐待したのは、いちばん安いかもしれない）だということになる。この見方を裏づける証拠がある。例えば、ECPATの調査期間にインタビューしたあるウクライナ人の船員はこのようにコメントしている。「俺は男だ。生理的欲求があるんだ。7カ月海の上にいたので女が必要だった」。そこで船がある低開発国の港に停泊すると、彼は赤線地帯に行った。彼が言うにはそこは「汚くてぞっとするような」場所で、12歳か13歳ぐらいの少女が売春をする場所だった。このような場所で、男性が子どもを性的に虐待する機会が増えるのは明らかだが、その船員によれば、彼は選んでその場所に行くわけではなく、「必要に迫られて」行くのである。また、子ども売春は一般的に売春市場でいちばん安い部分（西側諸国では路上売春を意味するが、貧しい国では最も汚い売春宿を指すことが多い）に集中しているという事実を繰り返すことも重要である。さらに、自分たちの想像上の性的「必要」を満足させるために買春する低賃金の移住労働者や地元の人たちもしばしば、子どもの売春婦を性的に虐待する。

しかし、多くの男たちが、自分たちには単に生物学的にセックスが必要であるという考え方に立って買春を正当化し定義づける一方で、この「必要」をどのように、誰によって満足させるかは、完全に無差別だという男性はほとんどいない。事実、完全に無差別ならば、買春をする理由はどこにもないだろう。ひとりであるいは仲間の兵士や船員、移住労働者、旅行者と一緒に、きわめて容易に性的「解放」を見つけることができるからだ。男たちが「必要とする」女性の種類にほとんどこだわらないと思える理由はどこにもないし、実際には14歳から20歳ぐらいの売春婦を好む男性が多いように思える。このくらいの年齢の少女たちは女性の美しさの文化的理想にぴったり合いそうだからである。この仮説を支持するのは港町の売春婦の調査からで、彼女たちは年をとるにつれて客を惹き寄せるのがだんだん難しくなると述べている。最後に、エイズや他の性病の伝染についての誤解から、性的「はけ口」は生物学的な必要だという想像を満足させるために買春する男たちは、病気にかかる率が少ないと誤信して年の若い売春婦を選ぶ可能性がある。

2. 男の同僚や友達と仲間意識を得るために買春する男性

買春は時として、大いに楽しむ行為としてグループで経験されることがある。男としての自己認識を固め合い、グループへの帰属意識を高めるからである。男性従業員のためにグループで性的搾取を組織する雇い主は、まさに「男の絆」を強めるためにそうするのであって、ラグビーやクリケットやフットボールクラブなど、徹底した性差別を再生産し補

強するためのものと何ら変わらない。また、男性の友達同士で買春観光を目的に一緒に旅行することも多い。職場の同僚や友達がいれば、子どもの性的虐待に対するタブーを破らないだろうと期待されるだろうし、思春期前の子どもの虐待に関する限りでは確かにその通りである。しかし、買春観光客や外国のビジネスマンに関する調査では、15歳から18歳までの思春期を過ぎた少女に対する状況次第の虐待はごく一般的に行われていることが示されている。ECPATの調査期間にインタビューされた二人ないしそれ以上で旅行しているビジネスマンや買春観光客は、関わった売春婦の本当の年齢についてしばしば互いに自分の利益になる自己欺瞞を強化する一方、少女の年齢の話になると、自分の友だちは「ゆりかご相手にセックス奴」だとか友だちが買った子ども売春婦の「ガールフレンド」は「承諾年齢にも達していない」などと笑いながら言い合い、冗談にしてしまう場合もある。

3. 「真の」男だという感覚を得るために買春する客

他の点では非常に異なった社会が多数ある中で、男性は性別役割（ジェンダー）イデオロギーによって社会化されている。女性や他の男性、自分自身のからだや物質的対象をうまく支配できることがすなわち男らしさだとするイデオロギーである。また、彼らは三度の食事のようにポルノを見る。そこでは「理想的な」男たちが性的対象となった女性に強大な権力を行使する（または、たくさんある同性愛のポルノでは男性に）。マスターベーションの夢想だけでなく、多くの男たちのセックスとは関係ない空想も、他人に命令する権力をもつことが本当に「男らしく」なるという考え方を中心にしており、金さえあれば、売春制度こそまさにこうした権力を彼らに与えるのである。性産業は其中で働く人々を性的「商品」に貶めるため、この商品を買う男たちを同時に「最高位の消費者」に変える。こうした理由から買春（ストリップやのぞき、ライブ・セックスショーへ行くこともふくめて）を是認するビジネスマン、兵士、船員、移住労働者、地元の人々が世界中にいるのである。もう一度言うておこう。子どもの売春婦は商売としてのセックス市場で低価格の部分に入ることが多いので、さほど裕福でない男たちはしばしば、大人の売春婦よりも子どもの売春婦に対して「消費者」の権力をふるうことができ、そのためたとえ彼らが子どもに限定した性的興味を持っていないとしても、状況次第で子どもの虐待者になることが多いのである。

性的な対象となった人間を支配したり命令したいという欲望が動機の買春者にとって、貧困がはびこり、性産業がじゅうぶん発展し高度に商業化されている場所は理想的である。

これは買春観光客の一つのタイプ、こうした条件に合う都市やリゾート地を何度も訪れる「マッジョ・マン」を理解するのににどくに関係がる。彼らは年に一度か二度こうした場所を旅行するが、それは鏡を通してマスターベーションする時の空想が奇跡的に本当になり到達できる世界へ入っていくようなものである。これは非常に安く売春婦に性的に接触できるからでもあるし、並べて売っている性の商品が余りに多種多様であるため男たちは「どんなことでも」要求できるからでもある。その上、こうした場所では買春相手は実際に「商品」以外の何物でもないという意識が抑制を解いてしまうので、マスターベーションの夢を実際に体験してもいいと思うのである。確かに、買春観光客が好む都市のセックス業界の特別の組織は、徹底して売春婦を対象化し人格を奪い去る。例えば、延々と立ち並ぶゴーゴーパーや売春宿では、買春観光客に対し売春婦はなにか「大量生産」された物というだけでなく、高度に標準化された商品とという感覚を植えつける。(例えば、ほとんど同じような体型の少女や女性、少年や男性がそっくりの衣装を着て並んでいる。洋服には番号がついていることが多い。) 他方、買春者が頻繁に訪れるライブのセックスショー(ふつう、少女や女性が膣から空気や物を出したり、長くよった布や、つながった鈴やかみそりの刃を引っぱり出す演技が呼び物になっている)によって、これら人種差別された「他者」を単なる生きた性器にすぎないという考えがさらに強化される。

買春者のすべてがこのようなあからさまな商品化を好むわけではないが、そこから得る快楽の一部は女性に対する一般的な敵意と結びついているように見える。売春宿に並べられ、番号をつけられ、どんな男でも利用できる女性や少女を見るのは、その女性たちが支配され屈辱を受けているのを見ることである。こうした男たちが想像する性的接触は自分の幸しか考えていないが、目の前の女性たちはそれを「阻止する」力も奪われている。結局、彼らの快楽は性的な対象として女性を支配する立場にあるという感覚から来ているのである。次に紹介するあるイギリス人の買春観光客とのインタビューにそれが示されている。

ある晩、私は売春宿に行った・・・すてきなカウチに座らされる。・・・そしてカーテンが開けられると、ガラスのスクリーンの向こうに少女が全員番号をつけて座っているんだ。男が「何番がお好みですか」と聞く。少女たちを眺めて、・・・「7番か8番がいいな。いい子かい？」と言うんだ。すると男は、「はい、問題があれば電話して下さい。何とかします」と答える・・・彼らはウオーキートーキーでスクリーンの向こうに声をかける。「7番、行って服を着なさい」・・・そこで彼女は自分が

買われたことがわかり、客と一緒に出かけるというわけだ。

この男性はとくに子どもに性的な興味があるからではなく、道徳的にも性的にも見境がないため、売春した子どもを虐待した。このタイプの男性は、自分が少女の容姿に「性的に引かれる」なら、売春宿やバーからつれてくる少女が14歳だろうと24歳だろうと気にしない。その上、子どもの性的虐待は「消費者」としての彼らに提供される性的経験が一つ増えるだけのことになる。例えば、インターネットの「ワールド・セックスガイド」への匿名の投稿者は、「休暇中」に経験した6つの「冒険」を述べている。最後の「冒険」は12歳の少女が値下げされていた売春宿へ行ったという話だった。身体の小さい未成熟な子どもに彼が行った性行為は、この旅行中に買った新しく胸がわくわくする「商品やサービス」のひとつとして語られているのである。

4. 性的に逸脱した行為をやりたいという強迫観念を満足させるために買春する客。あるいはきわめて無防備、無力で、対象化され品位を奪われた個人に対して性的な権力を行使するために買春する客。

先に見たように、多くの男性は、男なら誰でもある種の「自然な」性的衝動を持っており、異性との性交が必要になると信じている。一部の男性（上記の4. で論じた男性の大半を含む）にとっては、この信念が根の深い女性嫌いの世界観の基盤になっている。というのは、彼らは自分たちを「美しい」女性と出会ったらセックスしなければならないという生物学的欲求の犠牲者だとみなしているからであり、男性の肉体的な幸福に不可欠な源（つまり女性のからだ）をコントロールしているのが女性だと想像しているからである。したがって、女性を「はかりし知れない力」を持つ者として恨む一方、男性を統御のできない、無力な者とみなす。こうした男性にとって、売春は自分自身や他人を性的存在として支配する手段なのである。常習的なセックス・ツーリストであるイギリス人男性は、売春について次のように語っている。「出かけて行って相手を見つける苦労をしなくてすむ。夜でも昼でもいつだって、ほしい時にすぐ手に入るのだ。とてもパワフルだと感じる。性生活をコントロールしていると感じるんだ。」

一部の男性の買春がもつ強迫観念的性質によって、彼らの買春はペドファイルや選択的虐待者の性的行動と非常によく似た性質を持つようになる。どちらも自分を弱い人間だと思っており、性的接触や無条件の感情的な支えを「阻止する」女性の力に対して、女嫌いの怒りを表す傾向がある。こうした客たちはしばしば、自分が買春で得る性的、心理的喜びはほとんど、法律を破っている、妻に隠れて浮気している、教えられてきた道徳を守っ

ていない、ある意味で規則や価値を逸脱していながらうまくやっていることから来る、と報告している。危険な要素はこうした男たちにとって、性的に興奮するために不可欠な要素であることが多い（そこで、ほかに選択肢が無数にありしかも容易に手に入るにもかかわらず、「高潔」で裕福な市民が街娼を買って捕まるといったスキャンダルをよく聞くことになる）。

その他の強迫観念的な買春者にとっては、報復という考え方が性的興奮の中心をなす。最近の精神分析の研究は、倒錯を本質的に三つの敵意（誕生直後の至福の状態と一体化を放棄することへの「怒り」、母親の勢力圏からうまく逃げられないのではないかという「恐れ」、こうした苦境に陥らせた母親への「復讐」の必要）から作られたジェンダーの異常であると示唆している。これは子どもを性的に虐待する性癖をもつ男性を解するのに役に立つ。言葉でも行為でも、強迫観念的買春者は女性のがめるような、優しい眼差しに怒りをぶつけるわけではない。経済的にも社会的、法律的にも対等な大人の女性は、彼女たちが自分自身をコントロールする、すなわち男性の要求に応ずるかどうか選択できるというだけで、途方もない脅威を与える者とみなされる。なぜなら、女性を選択できる立場にいるということは、自分が別個の存在であること、自由な意志をもち自由に関係を断つ能力を主張することであり、それ故にこのような男性の子の幼稚な怒りをかきたてるからである。売春婦でさえも、西洋の大人の売春婦に多くみられるように、契約条件の限度を決める立場に立った場合は、脅威とみなされるかもしれない。カナダ人のセックスツーリストとのインタビューはこのことをはっきり示している。彼は売春婦を「憎んでいる」といい、そのわけを説明した。彼は世界中で買春し、ヨーロッパや北アメリカの売春婦を特に嫌っていた。

すべてビジネスライクだ。時間決めて、タクシーのようにメーターが動いているみたいだ。感情がないんだ。ゴム人形をファックしたかったら、買ってきてふくらませればいい。ヨーロッパの売春婦は決してキスをしない。カナダでは、そんな馬鹿なことはない。売春婦とつきあって、彼女にお金を払わなかったらどうなると思う？ レイプだと言うのだ。強姦罪で法廷に立つことになるのさ。

彼が好きなのは、自分が行った貧しい国の何の力もない売春婦だ。「ここでは彼女たちは金を要求すらしめない。客次第だよ」。買春が非合法の国へ来た裕福な旅行者は、彼が言うように「もしここでこの子に金を払わなくても、彼女にはどうしようもない。いずれにしる客を取ってなどいないことになっているのだ。辛い話さ」といった知識をもてあそぶ

のである。男性とのやりとりをほんの少しコントロールしようとする女性に激しい怒りを抱くあまり、一部の男性はとりわけ無力だと思ふような性的な相手を探すことになり、子ども売春婦はあきらかにこれにぴったり当てはまる。他方、子どもを性的に利用することはそれ自体違法行為であるので、自分の想像の中で自分を支配しようとしている権威ある人物や、自分に寛大な見方をしてくれない世界に対する一つの復讐となる。こうしたタイプの支配や復讐への欲望が極端な形を取ると、個々人は他の人間に苦痛やダメージを与えることに性的快楽を見い出すようになるのである。

最後に、何らかの方法でモノにされたり貶められていると思う人々と性的な接触を得る手段として、買春をする男性がいるし、実際には女性もいる。こうしたタイプの性的な興味を心理分析的に説明すれば、親密な関係に対する極端な恐れという概念が中心にくるだろう。子どもの頃、完全に頼っていた人（両親とか両親のような人）から裏切られた経験があると、依存を病的に恐れるようになることがあるというのが基本的考え方である。性的な関係は高度に親密な関係すなわち依存を意味することが多いので、こうした人々は性的な相手を「安全」で脅威を与えない存在にする方法を求める。無力と思われる相手（例えば小さな子どもや一見して残忍な仕打ちを受けていると分かる売春婦）や、ある意味で人間以下の相手（例えば「人種差別されている他者」）を選ぶことは、拒絶したり害を与えることはないと思ふことができる相手を選ぶ一つの戦略である。

5. 自分を買春者と思いたくない搾取者

はっきり特定できる買春者のもう一つのサブグループは、自分を「客」だと認めてはいないが、実際に売春婦を性的に搾取している男性や女性たちである。これは見事な自己欺瞞の芸当のように聞こえるが、南アメリカやカリブ海地方、アジアや東南アジア諸国で、一部の外国人のビジネスマンや海外定住者とともに何十万人もの買春観光客が毎年使うトリックなのである。彼らが訪れる国によって売春は多彩な形を取っているため、地元の人人との性的交渉の本質について自分欺くことができるのだ。売春宿だけでなくインフォーマルな売春のセクターが存在する。海岸や公園やふつうの旅行者用のバーで個人で誘ったり、ホテルやバーなどで得る安い給料を補うため時々売春で稼ぐ大人や子どももいる。さらに、とりわけインフォーマルで個人的な売春婦と客の交渉は、欧米で行われるものとはきわめて異なっていることが多い。買春旅行者を受け入れている国の個人的売春はふつう、欧米の売春婦のように時間単位で性的サービスを売のではなく、一般に18時間から2週間、客につききりで至れり尽くせりのサービスをし、欧米なら本物の愛情ととられるよう

な行為をする（キスや抱擁、一緒にベッドで眠る、日焼けローションを塗ったり客の髪や足などを洗うといった世話など、こうしたことはすべて、経験を積んだ西洋の売春婦は決してやらない）。

このため、買春旅行者や外国人定住者や外国のビジネスマンは、売春宿に行く必要もないし、売春婦を拾うため「みすばらしい」ゴーゴーパーに入る必要さえなく、事前に「取引」の交渉をする必要もない（この二つは欧米人にとっては「売春」の不可欠の部分とみなされている）。したがって、彼らは買春相手を「拾う」プロセスを商行為としての性的関係の始まりというよりむしろ、互いに引かれ合ったことを確認するのだと解釈できる。そして、大人なり子どもなりが後で、お金がどうしても必要だと打ち明けると、客は受けたサービスに対して支払うのではなく、同情や寛大さの現れとして彼らにお金を与えることにする。こうしたことすべてのおかげで、一部の性的搾取者は自分が利用した少女や少年は「本物の」売春婦ではないので、自分たちも「本物の客」ではないと自分自身に言いかけることができるのである。

こうした人々はふつう、1、2、4で論じた理由でこの種の性的行為をしたいと思っている。しかも買春観光客向けのリゾート地で働くフリーの売春婦の大半が18歳以下であり（実際に、子ども売春の多くがこのようなインフォーマルな売春部門で行われることが多い）、この種の買春者は、他の買春者と同様、状況しだいで子どもに性的な虐待をする傾向がある。自分の国では「性的な誘惑」の行動パターンをとりがちなペドファイルの買春観光客も、幼い子どもに性的に接触する手段としてインフォーマルな売春セクターを好むことも十分ありうる。このような男性が子どもたちに対して極度に感傷的になり、犠牲者と感情的に強い一体感を持つとすれば、うす汚い売春宿の小部屋にいる傷ついて半分飢えた子どもたちよりも、海辺で遊んだり、海でバシャバシャ泳いだり、コカコーラを飲んでいるところをながめられる小さな子どもたちとの性的接触を好むことはほぼ確かである。

IV 非商業的な関係での性的虐待の動機

難民キャンプ、孤児院、刑務所内のように非商業的なところで性的に子どもを虐待する大人の動機は、C) i) またはiv) で検討した考え方に即して見るともっともよく理解されるだろう。刑務所や難民キャンプで思春後の子どもを虐待する大人の囚人や難民はおそらく、自分達は性的「解放」を必要としているという信念（それにおそらく、他の人間に権力を行使することで自分自身の無力だという意識を克服しちという欲望）に基づいて行動している。

だが、子どものニーズを充たすことが目的の機関や組織で、子どもとの性的接触をもとめて故意に権威ある地位をもとめる大人たちもいる。その場合彼らは、先に論じたような親密になることや依存に対する恐れと、無力なセックス相手を支配したいという欲望が動機となっているように見える。臨床医は、ペドファイルや選択的虐待者の動機の一部は子どもとの「感情的な一致」という意識にあることが多いと主張している（彼らはなぜか自分を子どものように弱くて無力だと思っている）。このような「感情的な一体感」があると、自分は子どもたちを「愛し」「理解している」と考えるのは簡単であるし、それゆえ自分には捨てられたり無視されている子どもたちに与える物がたくさんあると、純粹に信じていることができる。ペドファイルの中には、援助団体や政府の役人など他の大人には自分を子どもの面倒を見ている、子どものための慈善家だと納得させておいて、その一方で、自分が世話をしている子どもに対して恐ろしい罪を犯している者がいることは確かである。

V 虐待を生じさせる他の要因

自国内で非商業的な関わりの中で子どもを性的に虐待する男性についての研究によれば、子どもとセックスをする動機づけを必要とするだけでなく、さらに3つの要因の存在が必要であるとされている。1番目に、大人は外部の抑制に打ち勝ち、虐待行為を行える条件を作り出さねばならない。それには実際の虐待に先だって、周到な計画と犠牲者に対する「教育」が必要になる。2番目に、虐待者は犠牲者の抵抗に勝たなければならない。これはたいてい、脅迫や買収または贈り物を通して行われる。子どもが売春させられている場合は、虐待者の側で「教育する」必要はなく、その子どもは抵抗しないのは明らかである。虐待が起きる条件を作り出すための努力も、非商業的な関係の中ではさまざまである。虐待者が子どもに対して権威を持ち社会でも高い地位を占めていなければいほど、虐待者の子どもへの興味は問題にされることが少なくなる。インドのフレディー・ピーツの事件は教訓となる例である。孤児院を運営していたピーツは、孤児院の子どもたちの毎日の生活にほとんど絶対的な権威を持っていて、また、地元のコミュニティかでも（慈善事業や医者だと名乗ることによって）積極的に尊敬を集めるようにふるまい成功していた。イギリスのフランク・ベック事件は、このような虐待には国境も、経済的な違いや「人種的」境界もないことをはっきり示している。世界中のどこの国でも起こりうるし、現に起きているのである。

最後に、ペドファイルや選択的虐待者は自分の行為が違法で、社会的に禁止されていることを知っており、虐待を行うには内面にある抑制を克服しなければならない。また、虐待者

の大半は、虐待に対して子どもは同意しているという作り話を必要とするしほしがりもする。あからさまで逃れようのない暴力的な行為から性的快感を得る虐待者もいる（子どもの売春婦の中には、涙を流しているのに膣や肛門に挿入されたり、オラル・セックスを強要されると語る子たちもいる）が、彼らはまったくの少数派である。商行為であれ非商業的な関係であれ、虐待する大人は自分の行為の正当化や弁解のために、子どもは実際にはセックスに同意しているのだと自分を納得させたいために、一定の「認識の歪曲」という手段を用いる。次にこのような歪曲について考えてみたい。

1. 認識の歪曲と性犯罪

イギリスやアメリカで行われた子どもを性的に傷つける男性に関する研究は、子どもが虐待されるのは子どもの側にも何らかの責任があるとか、大人との性的な接触でも傷ついていない、こうした接触に同意したり利益を得ることができる、といった歪んだ態度や考えが最大の共通点だと結論づけている。買春者（セックス・ツーリスト、地元民、船員、兵士、ビジネスマン、外国人定住者）も、自分が国の内外で性的に搾取する売春婦に関してまさに同じような認識の歪曲を用いる。選択的虐待者や状況次第の虐待者を調査すると、こうした歪曲は以下のような形を取って現れる。

1. 1 子どもは（他人や経済的な状況によって）「売春させられている」とみなすのではなく、「売春婦」であるとみなすことで、性的搾取者は、自分が虐待する子どもの側に虐待される責任があると自分に言いきかせることができる。しかし、大半の売春婦は近親姦による虐待やレイプ、暴行を受けながら何とか生き残り、第三者も売春を強制されたり、生存の最後の手段として売春をしているという事実を、買春者は認識していない（これは先進国でも発展途上国でも同じである）。実際、買春者は、自分に近づく子ども売春婦は「生活の手段」として自分から売春を選んだのだと自己弁護する。また、自分が子どもを誘惑したのではなく、子どもの側がからだを売るとを「選んで」、虐待を招いたのだと自分に言い聞かせる。ある買春観光客は自分がセックスした13歳の子どものことを、「彼女は何かを期待していた。それは棒付きキャンディーじゃなかったんだ」と述べている。この種の考え方は、子どもに暴力を用いたり傷や苦痛を与えることを正当化することにつながる。

1. 2 子ども売春婦の虐待者は概して、極度に性的な形を取った人種差別主義や売春婦に対する極端な敵意を示す。ECPATの調査の過程でインタビューされたセックス・ツーリスト、外国人定住者、出張中のビジネスマンは例外なく、自分たちをもてなしてくれる

文化は西洋の文化よりも性的に「オープンで」「自然で」「自由」だと述べた。このような考えによって、彼らは訪れる国の性的な行動のもつ意味を勘違いすることになる。彼らの主張によれば、6歳の子どもたちが踊っているのを見ると、西洋の子どもたちよりも身体が成熟し性的だということがはっきりわかる。このような国の少女達は14歳までに大人になり、性的な経験をしているので、売春しても少しも傷つかない。「彼女たち」は皆いつも「せっせとやっている」。このような考えは、買春受け入れ国では近親姦や子ども売春は当たり前になっているという知識に基づくひどく歪曲された説明と結びつくことが多い。虐待者は、子どもはすでに大人との性的な接触を強いられているので、自分の虐待行為は実際には犯罪ではないと自分に言い聞かせる。このような方法で、性的搾取者は自分との性的接触で子どもが傷ついたりしないと自己弁護するのである。次に、カリブ海のセックスツーリストのきわめて不快な発言を例としてあげる。

ここではセックスは自然なことなんだ。誰もが盛んにやってるよ。父親は娘とやるし、兄弟は姉妹とやる。全然気にしない。誰とでもする。すべての人とするのさ。相手が誰だとか、いくつだとか気にしない。動物と同じだ。そうとしか説明できないね。犬や猫や雄鳥のようだ。雄鶏が農家の庭でやっているのを見たことがあるかい。出会った雌鳥の上に飛び乗るだけなんだ。それがここでのやり方だよ。女の子は10歳になるまでに、アメリカやアイルランドの女が一生かかっても経験できないほどの経験をしている。女の子はそれが男を幸福にさせておく方法だと知ってるんだよ。彼らには自然なことなんだ。男を喜ばせる自然なやり方なのさ。

地元の男たちも子どもの売春婦に対する性的搾取を正当化するために同じような理由付けをする。それを理解するには、世界中の大都市や港、鉱山町で、子どもの売春婦は実際には地元の子どもではなく、外国や国内の他の地域から移住して来たり、売春斡旋業者につれてこられた子どもなので、彼らを虐待する地元の男たちとは、人種や民族や地域も国も異なっていることが多いという事実を認識する必要がある。さらに、子どもが地元の男と社会的身分が同じである場合は、地元の虐待者は自分の行為を正当化するために個々の子どもが性的に「ふしだら」であるとか「不道徳」（「人種」や文化的にではなく）であると強調することが多い。子どもはすでに「売春婦」なので（すでに「汚れていて」少なくとも人間以下であるので）、自分の虐待行為で傷つくことはないとは自分に言い聞かせるのである。

1. 3 子ども売春婦は家族を養うためどうしてもお金がいるという事実は、子どもが大

人との性的な接触に同意していて、そこから利益を得ている証拠として取り上げられる。例えばセックス・ツーリストは「少女たち」は自分に頼っていると言う。「われわれがここへ来なくなれば少女たちがどうなるか、考えるのもいやだ」。地元の客やビジネスマン、兵士、外国人定住者、船員も同じように「ひいき」になることで子どもに恩恵を施していると自分に言い聞かせることができる。

このような認識の歪曲によって、搾取者達は虐待行為によってどんな肉体的な傷も精神的な傷も負わせてはいないし、実際に子どもは同意し、利益を得ていると自分をごまかすことができる。欧米のセックス・ツーリストは特に、自分の利益になるようにもっともらしく説明する名人である。例えば、買春観光のガイドブックでは、売春宿で借金に縛られた子どもたちを性的に搾取することを「やってみる」よう男たちに勧めている。良心がとがめた場合のことは、アメリカ人の著者は親切にも、「それを合理的に解釈する一つの方法は、『自分がやらなくても、後ろにいる奴がやる。どちらが子どもに優しそうか』を問うことだ」と書いている。

VI 子どもを性的に搾取する国内および国際組織

1. 国際的なペドファイル組織

a) 章でペドファイルと選択的虐待者は均質の集団ではないと述べたが、これは国内や国際的なレベルで組織化する際の彼らの傾向にもあてはまる。ペドファイルや選択的虐待者の中には本質的に孤立している人々もいれば、経験やポルノ、さらには犠牲者まで他の虐待者と分かち合いたいと思う者もいる。後者のタイプはさらに分類することができる。かなりインフォーマルな方法で手紙や写真を交換し、少数のうまが合う人々と「共有」するだけで、自分を確認できる人たちがいる。また、ペドファイルや選択的虐待者仲間の大きなネットワークを推進するために、かっちりした系統だった組織を運営することで心理的な満足（時には物質的な利益も）得られる人々もいる。国際的「組織」を運営できる可能性は、最近コンピューター技術の発達によって非常に高くなった。今ではペドファイルと選択的虐待者はインターネットとコンピュータネットワークの告知板を利用して、比較的安全に情報や経験やポルノを共有できるだけでなく、国境を越えて連絡をとることもできる。こうした活動をする虐待者の動機は、次のような欲望を考慮すれば、最もよく理解できるだろう。a)他の人たちと積極的に接触することで自分の行動を「正常化」したいという欲望、b)危険を伴う秘密主義の人を操る行動を取ることで、自分の恐怖を克服するだけ

でなく他者を支配する力を示したい、という欲望。この種のペドファイルの「組織」を運営する人々にとって商業的な利益は一般にほんのわずかだと思われているが、すでに組織化されたセックス産業に従事している業者は、ペドファイルと選択的虐待者の欲望を「副業」として儲けの対象にできる。例えば、客にもっと「目先のかわったもの」を提供するために大人や子どもの売春婦を手に入れたりリクルートする「エスコート」組織がある。このような組織はたとえ小さくても、非常によく組織されていることが多く、北アメリカやヨーロッパ諸国だけでなく南アメリカ諸国でも、オーナーは「顧客サービス」を高め、売春の発覚を避けるために携帯電話で子どもを送り届ける。

2. 国内および国際的な買春観光促進とそのための組織

この問題は「子どもの性の商品化と搾取に反対する国際会議」のために用意された買春観光に関する基礎資料で取り上げられている。

3. 買春組織への軍隊の関わり

多くの国で、買春組織に国内及び国際的な軍隊が関与している証拠がある。国内的なレベルでは、軍関係者が自分たちの地位や権威を利用して、さまざまなやり方で少女を売春目的で斡旋したり、売春宿に投資したりこれを運営したり「保護」することがあり、その中には子どもの体を売るところも含まれている。国際的レベルでは、外国の軍関係者が「休養」(R&R)地になっている国の性産業の発達に重要な役割を演じてきた。莫大な数の買春者を絶え間なくを送り込み、また基地周辺の軍人用売春宿の設置や規制に関わってきたのである。1990年代、国連は世界中にたくさんの部隊を配備した。こうした軍隊による買春は公式に制裁されていないし、積極的に非難したり取り締まっているようでもない。90年代初期、モザンビークやカンボジアで国連軍に対する真剣告発が行われた。カンボジアの国連軍による性的搾取について地元のグループは苦情を訴え、それに応えて一定の地域は立入禁止になり、兵士のための新しいガイドラインが導入された。しかし情報によると、この新しい「ガイドライン」はさほど厳しいものではなかった。兵士はマッサージパーラーの前に車を止めないように言われたが、子どもへの性的搾取の問題の何らの対処もされなかった。証拠はすべてそろっているにもかかわらず、この問題を担当する国連職員が子ども売春の存在をまったく信じていなかったからである。

4. 「メールオーダー花嫁」と家事労働者斡旋業を通して子どもを性的に搾取する組織

「メールオーダー花嫁」と家事労働者婦斡旋業は、大人の女性に加えて子どもの性的搾取を国内・国際的レベルで組織するもう一つの手段である。例えば、イギリスやドイツの

会社が作ったメールオーダーのカタログでは東欧の16歳の少女が「妻たち」として提供されている。10代のインドやアフリカの少女は家政婦兼売春婦としてアジアや中東諸国に売られる。南アメリカでは12歳から18歳の子どもが職業紹介機関にリクルートされ、家政婦兼売春婦として独身男性に供給されている。

Ⅶ 子どもへの性的搾取者の取り締まりとリハビリテーション

本稿では、必ず買春者となるとは限らないペドファイルや選択的虐待者だけでなく、買春者によっても子どもが性的に搾取される事実を強調してきた。このことは次に考える取り締まりとリハビリテーションの問題と密接な関係を持つ。

1. 海外旅行をするペドファイルと選択的虐待者の法的な取り締まり

どこの国にもペドファイルや選択的虐待者がいるのは悲しむべきことだが、どこの国もこうした人間に対する阻止や取締りを試みていることはきわめて重要である。だがここでは、外国を旅行する虐待者に焦点をあてる。その理由は、一般にこうした虐待者は貧しい国を旅行する豊かな国の国民であり、これら貧しい国々では豊かな国から来た虐待者はおろか自国の虐待者も取り締まることができないからである。豊かな国には虐待者から「すべての」子どもたちを守る道徳的な義務がある。豊かな国のペドファイルは思春期に達しない子どもとの性的な接触が世界中のどこでも犯罪であることを知っていて、自分たちの行動には危険が伴っていることを意識している。そのため、通報しそうな弱い子どもたちに的を絞り、さまざまな状況や国で逮捕される危険を推し量る。あるイギリス人男性が関わった最近の事件は、その例である。イギリスでは彼は起訴されることがないよう、身体的に接触しない形の虐待にとどめていた。貧しい国々（彼の判断では発覚と起訴の危険性は低い国）に休暇で行くと、そうした抑制を取り払い、子どもに性器を接触したり、肛門に挿入したりして、その場面をフィルムに収めたりした。この男性ははっきりと、本当に起訴されることがあると思ったら、こんな風に子どもを虐待しなかったと述べている。彼はイギリスでは自分を抑制できた以上、この主張はもっともらしく聞こえる。これは、子どもへの性犯罪に対処するため域外適用の法律が制定され、効果的に実施されれば、外国を旅行するペドファイルによる子どもへの性的虐待の発生、または少なくとも虐待のひどさを抑えるのに役立つと信じる理由になる。

豊かな国から来た選択的虐待者は、自分たちの行為は自国では違法だということを知っているが、「第三世界」の国々の中にも法律で承諾年齢を決めている国があることに必ず

しも気がついているわけではない。たとえ法律を知っていても、ペドファイルと同じく、こうした行為で起訴される可能性は低いと信じていることが多い。カナダ人の選択的虐待者はカリブ海諸国について「誰も気にしない。警察も気にしないし、親も気にしない。なぜ、私が気にしなければならないんだ」と語っている。しかし、この同じ男性がヨーロッパや北アメリカでは、法律で「いやな経験」をしたので、子どもの売春婦とは避けるよう気をつけていると言う。もうひとりの選択的虐待者は自分の国では「少女を見ただけで牢屋にぶち込まれる」ので法律を破らないと言う。域外適用の法律が目に見える形で実施され、有効な取り締まりが行われれば、このタイプの犯罪者を抑える助けになるだろう。それはまた、買春者が状況次第で子どもを虐待するケースを減らすことにもなるだろう。というのは、例によって彼らも東南アジアや南アメリカ、カリブ海、アフリカの国ぐいの承諾年齢法を知らず、こうした地域では10代の少年少女との性行為は社会的に認められていると確信しているからである。後者のタイプの虐待者は搾取した子どもが本当は18歳以上だと自分に言い聞かせたい人が多く、売春婦の年齢について正確に知る必要はないと思っているのは明らかである。外国で休暇を過ごしている間に未成年者とセックスすると、現実には起訴される危険があると思えば、間違いなくこうしたことは変わるだろう。そのために、子どもへの性的搾取者に対してさらに大きな国際的な取り組みと協力が必要である。

2. 買春者の法的取り締まり

子どもへの性的搾取の大部分は商売として行われるので、子どもの売春婦を状況次第で虐待するすべての人（これには地元民、兵士、船員、トラック運転手、ビジネスマン、外国人定住者、セックス・ツーリストが含まれる）を取り締まる方法を見つける必要がある。法律で厳しく締め付けられているのだと感じさせるために、買春法の焦点を思い切って変える必要に迫られているのだ。今日世界のあらゆる地域で、最も積極的に取り締まりの対象になるのは、客ではなく思春期を過ぎた子どもの売春婦である。14歳以上の少女は日常的に嫌がらせを受け、逮捕され、裁判を受け、収監されるか、さもなければ、貧しい国だけでなく豊かな国の刑事裁判制度で罰せられる。その一方で、彼女たちを虐待する大人の男性は自由に歩いている。買春者はこのことよく知っていて、つきあう売春婦が未成年であっても、少しの罰金や賄賂を払えばすむし、それ以上の危険はないと正しく予測している。ある国では選択的虐待者のセックス・ツーリストや地元民が自分は責任をとらなくていいことを自慢話にしている。彼らが搾取した子どもは（たとえ彼らが略奪されたりレイプされても）、警察に行けば結果として自分たちが嫌な目にあうことを知っているのを、

決して警察に行く勇気がないことを知っているのだ。したがって、商行為としての子どもの性的虐待を、はっきりと「虐待」だと認めることがきわめて重要である。そうやってはじめて、犯罪者ではなく犠牲者を取り締まったり収監するといったことがいかに不合理かが明白になるだろう。虐待者の行為は刑事上の責任があるとみなされるようになってはじめて、法律が抑止力として機能することが期待できる。

3. 加害者の治療プログラム

子どもの性的搾取者の大多数は、の犠牲者である子どもは虐待に同意していると想像する必要があるので、自分を納得させるためのさまざまな認識の歪曲を用いる。商行為ではなく子どもを虐待する男性に関する調査では、子どもの中には大人との性的接触により傷つけない子どももいるとか、子どもは本当はそうした接触を求めていると確信している男たちは、虐待を繰り返すおそれがあることが判明している。したがって、国内で罪を犯すペドファイルと選択的虐待者のための治療プログラムの第一の目的は、虐待を最小限に抑えたり否定することではなく、虐待者が用いる認識の歪曲に挑戦し、そうした行為は虐待なのだと思わせ、犠牲者に対する共感を抱かせることにある。こうした治療プログラムは、資金が投じられたところではある程度成功をおさめているようだ。加害者を治療する診療所の医師によれば、「子どもを虐待者から守る唯一の見通しは、こうした男たちが犯罪を繰り返さないように、彼等とともに時間をかけ費用を惜しまず、苦痛に耐えて努力することしかない。彼らはそうした努力を受けるに「値する」かどうかにかかわらず、われわれにとって子どもを守る最善の形はそれしかない」と言う。

しかし、子どもへの性的虐待の大半は子どもを商品として扱う虐待である以上、買春者のための治療プログラムを開発し、商品として子どもを虐待する加害者をそうしたプログラムに強制してでも参加させることが最も重要である。このようなプログラムは現在カナダ、オーストラリア、アメリカ、オランダで提唱されている。例えば、ポートランドの組織SEEPは逮捕された買婦者のための教育プログラムと並んで、学校や大学や地域のグループ、近隣の団体や企業のための教育と防止プログラムを提供している。買売客とともに行う活動としては、初犯の加害者のための集中ワークショップと、常習犯のための長期カウンセリングがある。その目的は買春の現実（例えば、アメリカではふつう買春を始める年齢は14歳から17歳であること、売春婦の85%は子どもの時に性的に虐待されたと報告していること、売春婦の90%はポン引きに買春を強要されていること、などなど）について彼等を教育するとともに、性的な搾取の行為を正当化するためにこうした人たが用いる

認識の歪曲を検討することにある。こうしたワークショップとカウンセリングプログラムを通じて、売春婦を買った人は売春させられる女や子どもをモノとして扱ったり侮辱するのではなく、彼女たちの身になれるようにしていくのである。

こうした活動は、セックス・ツーリストの需要の問題だけでなく、豊かな国であれ貧しい国であれ地元の需要という問題にも関連する。なぜなら、どちらの需要も、子どもの売春婦に対する共感が根本的に欠けており、道徳的に退廃しているとか、「人種的」または民族的に「他者」なのだともみる見方に支えられているからである。だが、これらの教育プログラムは法執行と刑事裁判の担当者の積極的な支持がなければ効果がない。法執行機関は子ども売春の客に焦点を合わせるべきであって、裁判所は売春させられる子どもに対する性犯罪と、売春にかかわっていない子どもに対する性犯罪と同じように真剣に取り組む必要がある。

Ⅷ 将来に向けた提案

1. 虐待者と潜在的虐待者への予防教育

買春者と潜在的な買春者の予防教育プログラムを世界規模で開発することが必要である。買春と男性のセクシュアリティについて流布している間違った認識を、若者の間で十分に検討しなければならない。さもなければ、大人になって性的搾取者になる者も出てくるだろう。子どもへの性的虐待が犠牲者におよぼす影響や、子どもや女性が売春するにいたる理由、世界中の承諾年齢法や買春法に関する教育が行われれば、ジェンダーや人種差別主義の問題についての意識を高めるだけでなく、現在虐待者が自分の行為を正当化するために用いている、何でも許されるという話を打ち崩す役に立つだろう。

2. 特定の買春者グループ、子どもに対する性的搾取者グループに対する防止活動

陸軍や海軍関係者は事実上、「いやでも逃げられない」聴衆であるところから、上記の i) に沿った教育プログラムを訓練の一環として導入するのは非常に簡単である。(調査によれば、セックスツーリストや地元の買春者の多くは元兵士であり、軍隊で買春に「ふける」習慣がついたことが判明しているので、軍関係者を対象にするのは特に重要である)。社員の買春を大目に見たり奨励する会社も目標にすべきである。同様に、飛行機で買春観光の目的地へ移動する間に、観光客には、特に選択的虐待者やペドファイルや状況次第の虐待者が用いる認識の歪曲を取り上げた教育ビデオを見せることもできるだろう。これは虐待者ではない観光客が虐待を目撃した時、虐待している観光客の行動をとがめるのを促

すだろう。

移住労働者からの商品としての性の需要は、移動する男性労働者と妻やパートナーを強制的に引き離してきた移民政策や会社の政策が変わることで、ある程度対処できる。抑圧的な移民政策は雇い主が家事労働者に及ぼす絶対的な力をますます強めているのため、もっと広く異議を申し立てる必要がある。同時に、援助組織のスタッフ、孤児院の管理者、宗教伝道者、教会関係者による子どもへの性的虐待は、仕事の内容を詳しく調べ、モニターする方法を確立することで減らせるだろう。特に、貧しい国のプロジェクトに多額の資金援助をする機関には次のような点に十分注意をする必要がある。a)プロジェクトが一人の外国人男性によって始められて運営され、地域社会への報告責任も持っていない場合。b)プロジェクトが貧しい幼い子どもたちへの援助だけに焦点をあてている場合。この場合も、子どもの囚人に対する性的虐待を防ぐ、いくつかの自明のステップがある。(子どもの囚人を大幅に減らすこと、監禁が避けられない子どものために独房を用意することなど)

3. 子どもへの性的搾取者の取り締まりと報告を奨励するための意識化

買春観光客を新たに惹きつけている国ぐにの教育も、予防のための重要な役割を果たすことができる。地元の人々は買春観光の現象に気づかないことが多い(気づいたときには遅すぎる)。とりわけ、子どもへの性的虐待についてほとんど知らない可能性がある。こうしたことを知らなければ、西洋人のペドファイルがストリートチルドレンに食べ物を買ってやったり、ぴったり寄り添ったり、ホテルの部屋につれて帰ったりするのを見ても、「親切」な行為だと解釈して、心配すべきことだと思わないのは確かである。子どもへの性的虐待の取り締まりと防止のためのたくさんの組織(それに何百、何千もの個人)が存在しているのに、そこからの援助はまったく受けられない。実際に、こうした組織や個人が買春を大目に見ているので、陸軍や海軍、観光産業や船員の雇用者、多くの企業は問題を助長しているのである。こうした組織が虐待の防止や取り締まりに積極的な役割を果たせるよう、教育や意識向上プログラムを利用することができるだろう。個人の観光客に対しては、買春観光にかかわっている同国人の行動に異議を申し立てるよう奨励しなければならない。株主や年金基金の管理者には、自分たちが投資している企業の管理者が行う「接待」の本質を調査するよう奨励する必要がある。最後に、刑事裁判や法律の執行に関わる人々に、子ども売春が存在することを認識させ、なぜ子ども売春があるのか、子ども売春は社会的、政治的、経済的に無力な人への虐待であるだけでなく、国際的および国内の法律の条文に成文化された人権侵害の犯罪行為であることを教育する必要がある

る。

4. 調査と情報

今後調査しモニターする必要がある領域や問題はたくさんある。特に、世界中のさまざまな国での子ども買春の本質、組織、規模および虐待者の正体と動機に関する情報が必要とされている。新しい地域での買春観光の発展を監視する必要もある。そして、ペドファイルや買春者に対する治療プログラムが成功しているかどうかをモニターする必要もある。

(財) 女性のためのアジア平和国民基金

住所 〒107 東京都港区赤坂2丁目17番42号

電話 03-3583-9322

FAX 03-3583-9321